

ChatGPT Agentによる知財部門での特許調査業務活用

2025年7月17日にリリースされた**ChatGPT Agent**は、従来のChatGPTを「調査して行動する」自律型エージェントへ進化させたものです^①。Webサイトのナビゲーションや情報収集から分析・レポート作成まで、一連のタスクをAIが自動で遂行できるようになりました。企業の知的財産部門における特許調査業務は、まさに複雑なマルチステップの情報収集・分析が要求される分野であり、ChatGPT Agentの導入によって大幅な効率化が期待されています。以下、**日本の法制度下**で想定される具体的な活用プロセス、外部データベース連携、精度評価、ユースケース、そして実務上の課題について整理します。

ChatGPT Agentとは：研究と行動を統合するAIエージェント

ChatGPT Agentは、OpenAIのチャットモデルに**Operator**（Webブラウザ操作ツール）と**Deep Research**（マルチステップ深層調査ツール）の機能を統合した新機能です^{② ③}。ユーザーが自然言語で指示を与えるだけで、Agentが自分専用の仮想PC上で以下のような動作を行います^{① ④}：

- ・**ウェブ検索・ナビゲーション**: 内蔵のビジュアルブラウザでウェブサイトアクセスし、スクロールやクリック、フォーム入力まで自動で実行^①。特許庁のデータベース検索画面にキーワードを入力し検索する、といった操作も代行可能です。
- ・**情報収集と要約**: 複数のサイトや文書から情報を収集・統合し、高度に要約されたレポートを生成^③。これはDeep Researchモデル由来の機能で、**数十件のウェブ情報源から高品質なレポートをまとめる**ことを得意とします^③。
- ・**コード実行やファイル処理**: 仮想ターミナルでPython等のコードを実行し、データ解析やファイル生成も可能^⑤。例えば検索結果をCSVに整理したり、取得した特許文献PDFを解析する、といった処理も自動化できます。
- ・**資料作成**: 調査結果をもとに**編集可能なスライドや表計算シート**を自動生成する機能も備わっています^①。競合分析の結果をPowerPointでまとめたり、関連特許の一覧表をExcel形式で出力することも指示できます。

これらの機能により、ChatGPT Agentは単なるQAアシスタントではなく「**ユーザーの代理でタスクを完遂する**」実行エージェントとなりました^⑥。ユーザー企業側での利用イメージとしては、**AIの調査員**が一人追加されたような形で業務をサポートするものです。以下、その具体的な特許調査プロセスへの組み込みを見ていきます。

特許調査プロセスの自動化・効率化

知財部門の特許調査は、新規出願前の先行技術調査や他社特許の無効化調査、競合の特許網分析など多岐にわたります^⑦。ChatGPT Agentは、これらの**標準的な調査フローの各ステップ**で自動化・効率化をもたらします。

- ・**検索クエリの構築支援**: 特許調査ではキーワード選定とブール演算・分類記号（IPCやFI）の組合せによる検索式構築が重要です^⑧。ChatGPTは大量の技術用語知識を持つため、与えられた技術内容から同義語・関連語や適切な国際特許分類を提案できます。実際、日本の特許データベースJ-PlatPatは自動類義語展開が弱いと、人手で類義語を洗い出す必要があると指摘されています^⑨。Agentに技術要素を入力すれば、関連するキーワード群やIPC分類を洗い出し、「**検索式ドラフト**」を**自動生成**させることができます。たとえば「〇〇技術に関する先行技術を調べるため、どんなキーワードや

IPCを使えば良いか？」と聞けば、適切な語句リストやAND/OR/NOT 構造を提案してくれるでしょう。これは新人調査担当者のスキル不足を補い、クエリ構築の属人性を低減します¹⁰¹¹。

- ・**特許データベース検索の自動実行**: ChatGPT Agentのブラウザ操作機能により、特許庁や各国機関が提供する公開データベースでの検索自体をAIが代行できます。**J-PlatPat**（日本特許庁の無料検索サービス）や**Espacenet**（欧州特許庁のグローバル特許検索）、**WIPO PatentScope**などにアクセスし、先ほど構築した検索式を入力して**自動的にヒット文献を収集**させることが可能です。Agentは検索結果一覧をスクロールし、上位の特許公報を順次クリックして内容を取得できます¹。言語の壁も低減されます。たとえば**日本語キーワードと英語キーワードを組み合わせ**て検索することで、日本語データベースと英語データベース双方で漏れなくヒットしやすくなることが実務上知られています¹²。ChatGPTは日本語・英語の双方を理解できるため、**多言語横断的な特許検索**を一度の指示で行える点もメリットです。検索は人手では時間のかかる反復作業ですが、Agentなら24時間連続稼働で高速に回せるため**「検索→絞り込み→再検索」の反復も短時間で完結**します¹³。

- ・**関連文献の要約と比較**: 検索で集まった関連特許文献は、一件ごとに数万字に及ぶ明細書を読んで内容を把握し、発明との関連度を評価する必要があります。ChatGPT Agentはこの**文献レビューと要約作成**を劇的に効率化します。例えば、「検索で見つかった上位10件の特許について、それぞれ請求項の内容を要約してください」と指示すれば、Agentが各特許の請求項・発明の要旨を抽出し箇条書きでまとめてくれます¹⁴。また、ユーザーが検討中の自社発明のクレーム（要旨）を入力し、「これと類似した点・相違点を各先行文献ごとに比較してください」と依頼すれば、**クレーム対応表（対照表）のドラフト**を作成することもできます¹⁵。このようにして、AIが**主要クレームと各候補文献との対応関係を整理**し、新規性・進歩性の有無を判断するための材料を素早く提供します。特許無効化調査の場合も同様に、ターゲット特許のクレームを解析させ、そのクレーム要素ごとに満たす先行技術がないかAgentに探索させることができます。従来は調査員が数日～数週かけて行っていたマッチング作業を、AIは数時間でやり遂げる可能性があります¹⁶¹⁷。

- ・**調査結果のレポート化**: ChatGPT Agentのアウトプットは単なる箇条書き要約に留まりません。集約した情報をもとに、**レポート文章のドラフトを自動生成**できます¹⁸。例えば「〇〇発明の先行技術調査報告書を作成して。構成要素ごとに関連文献を整理し、新規性判断についてコメントして下さい」といった高度な依頼にも対応可能です。Agentは各文献の引用番号や出典URLを明示しながらレポートを作り上げます¹⁹¹⁸。ChatGPTのDeep Research機能では調査過程で参照したソースが明示されるため、**根拠付きの報告書**になり信頼性が向上します¹⁶。過去にはChatGPT（ブラウズ非対応時代）に特許調査をさせようとして、「**それらしいが誤った特許番号や発明名**」を**自信満々で挙げてしま**うといった問題が指摘されました²⁰。しかしAgentは実際のデータベースから情報を取得するため、出力文書内に特許番号・公報番号や日付など**事実データも正確に記載**される傾向があります（もっとも最終チェックは依然必要です）。最終的な報告書はWordやPDFで出力するだけでなく、**要望に応じてスライド資料化**することもできます²¹¹。例えば先行技術調査の結果をスライド5枚程度にまとめた要点資料や、競合分析結果を可視化したチャートを含むプレゼン資料をAgentに作らせることも可能です。

以上のように、特許調査の「**検索式立案→実検索→文献精査→レポート作成**」という一連の流れを、ChatGPT Agentがかなりの部分で自動化してくれます。ある導入事例では、AIによる特許要約ボットを構築した結果、「調査コストを従来比1/1000、工数を85%削減」できたケースも報告されています²²。この例では人手では1件に1週間以上かかっていた作業を数時間で処理し、結果として外部調査会社への依頼費用（1件数十万円規模）も大幅に削減できたとのことです²³。もちろんこれは最適に運用した場合の一例ですが、**ChatGPT Agentの活用次第で桁違いの効率化が現実**に可能であることを示しています。

外部データベース・サービスとの連携可能性

特許調査には各種の専門データベース利用が不可欠です。ChatGPT Agentは自前のブラウザとツール群を持ったため、基本的には人間のアナリストがアクセスできるウェブサービスには同様にアクセス可能です。具体的な連携シナリオとポイントを整理します。

- **特許庁提供の無料DB:** 前述のJ-PlatPat（特許情報プラットフォーム）は、日本国内特許・実用新案・意匠・商標などの公報を検索・閲覧できる公式サイトです。ChatGPT Agentは、ユーザーの指示に従いJ-PlatPatの検索フォームにキーワードや分類を入力し、検索実行→結果一覧ページから必要な公報をクリック→書誌事項や要約、本文をスクレイピング、といった一連の操作を自動化できます¹。J-PlatPatは基本的にログイン不要で利用できますので、**追加的な認証手続きなしにAgentがアクセスできる**メリットがあります（もっとも大量アクセス時の負荷や規約遵守は留意が必要です）。前述の通り日本語特許だけでなく英語要約も収録されていますし、また2025年には生成AIを活用した「意味検索」や類似図面検索機能の導入も開始されており、検索精度が向上しつつあります²⁴。ChatGPT Agentはこのような**特許庁DB側のAI機能とも組み合わせ**、より高度な検索結果を引き出すことも期待できます。
- **海外特許データベース:** Espacenet（欧州特許庁提供）やWIPO PatentScope（世界知的所有権機関提供）は、世界各国の特許公報に横断検索をかけられる無料サービスです。Espacenetは英語インターフェースですが、日本語キーワードでもある程度ヒットしますし、PatentScopeは日本語を含む様々な言語に対応しています。ChatGPT AgentはそれらサイトのUIを操作して検索・閲覧することもできますし、必要であれば**各サービスが提供するAPI**をAgentに利用させることも可能です。例えばEspacenetには公開API（Open Patent Services）があり、Agentのコード実行機能でHTTPリクエストを送って特定特許のデータ（タイトルやアブストラクト、クレーム文など）を取得し、それを解析するといった連携も技術的には実現できます。現状、OpenAIの提供する「**Connector（コネクタ）**」機能はGmailやGitHub等のアプリ連携が中心ですが²⁵、将来的に特許データベース用のコネクタが公式に提供される可能性もあります。また、Agentは**ユーザーがログインしている状態のブラウザを引き継げるため**²⁶、もし商用データベース（Derwent Innovation、Orbit、Scopus特許等）を企業が契約利用している場合でも、一度ユーザーがログイン操作を行えば以降の検索・閲覧をAgentに任せられることもできます。つまり、**社内で使っているほぼ全ての外部特許情報リソースとAgentを繋げられる**と言えます。
- **非特許文献や他の情報源:** 先行技術調査では特許以外にも論文や技術記事、製品カタログ等の「非特許文献（NPL）」も重要です²⁷。ChatGPT Agentは通常のウェブ検索もこなしますので、Google検索で学術論文や業界ニュースを探し、それらの内容を要約・取得することも簡単です²⁸。例えば「〇〇に関する論文の主要結論も併せて調べて」と依頼すれば、論文データベース（Google Scholar等）で関連論文を探し、要旨をまとめてくれるでしょう。また、特許ファミリーや法的状況の確認といった調査ではUSPTOのPAIRデータやJ-PlatPatの法定情報も参照しますが、こうした**ウェブ上の公開データ**にもAgentはアクセスできます。さらにAgentの**ファイル処理能力**を使えば、PDF形式で提供される古い特許資料や審決公報等をダウンロードしてテキスト解析させることも可能です。総じて、人間が手作業で行っていた**複数ソースからの情報収集統合**を一貫して任せられる点が、ChatGPT Agentの強みです⁵。

なお、ChatGPT Agentを使う上では**各データベースの利用規約やAPI利用ポリシーの順守**も考慮しなければなりません。特に大量の自動クエリ発行はサイト側に負荷を与える可能性があるため、必要に応じて時間間隔を空ける、APIキーを取得するなどの配慮が必要です。また、商用DBの場合は自動スクレイピングを禁じているケースもあるため、利用企業の契約内容に即した運用とする必要があります。もっとも、Agentはあくまで**ユーザー操作を代行する存在**であり、適切に用いれば人間がブラウザで閲覧するのと本質的に変わらない方法で情報を得るため、大きな障壁はないでしょう。

検索精度・出力品質の評価

ChatGPT Agentは高度な言語モデル（GPT-4系列の新モデル）を基盤としており、その**タスク完遂能力は従来モデルを大きく上回る**と報告されています。OpenAIによれば、Agentモデルは汎用知識テスト「Humanity's Last Exam」で**従来のモデルの約2倍**となる正答率41.6%を達成し、難関数学ベンチマークでも従来比大幅向上を示しました²⁹。これはChatGPT Agentが推論力・計画実行力で最先端の性能を備えていることを意味します。実ユーザーによる評価やレビューも、概ね「**驚くほど高度な調査ができる**」と好意的です。例えばあるユーザーは2月に先行公開されたDeep Research機能（Agentの前身）を試し、「人間が数時間かける調査を数十分で完了し、進捗や情報源も見える化されていて想像以上にすごい」という趣旨の感想を述べています³⁰。実際にDeep Searchモードで問い合わせると、まず調査の意図を確認する質問があり、次に関連サイトを自動巡回して情報収集、最後に**リンクや引用付きの詳細なレポート**が出力されました¹⁸³¹。この透明性と包括性は従来の単なるチャットBotにはない強みであり、特許調査レポート作成にも大いに役立つでしょう。

もっとも、**特許調査分野における精度・信頼性**については慎重な検証も必要です。UnitedLex社の知財コンサルタントらが2023年に行ったテストでは、当時のChatGPT（検索非対応）に簡単な先行技術質問を投げたところ、以下のような問題点が指摘されました²⁰：

- ・関連する特許文献そのものを提示できない（検索機能がないため一般的回答しか返さない）
- ・代わりに生成された回答は製品情報など文脈外の結果を含み、的外れになる
- ・特許番号や名称などの書誌情報に誤りが混入する（存在しない番号の発明を挙げる等）
- ・特許請求の範囲の論理的解釈や技術的含意を正確に汲み取れないケースがある
- ・ユーザーから入力したデータをすべて保持しうるため**秘密情報漏えいの懸念**がある

以上より、「**現段階では特許調査や知財判断に使うには心許ない**」との評価でした³²。しかし、これはGPT-3.5世代のChatGPTによる回答であり、検索機能もない状況での限界点を示したものです。**ChatGPT Agentでは上記のうち少なくとも上3点は大幅に改善される**と考えられます。実際にAgentはリアルタイム検索で特許公報そのものを閲覧・引用できますし、事実情報も直接参照できます。OpenAIも「以前のエージェントは複雑なタスクに不安定だったが、新Agentは遥かに強力だ」と述べています⁶³³。さらに**回答の出力明示により誤情報の検出も容易**です³⁴。一方、「**特許請求項の微妙な法的ニュアンスを理解し評価する**」という点については、最新のGPT-4ベースであっても依然チャレンジングです。特許文献の読み取り自体は高い言語理解能力で相当こなせますが、進歩性の判断や権利範囲の僅差の検討は、判例知識や法律知識と論理的思考を要するため、AI単独に任せるのはリスクがあります。OpenAIもGPT-4について「**完全に信頼できるわけではなく、特に重大な判断には人間レビューや追加文脈で補強すべき**」と注意喚起しています³⁵。したがって、ChatGPT Agentの出力品質は概ね高水準と言えるものの、あくまで**補助ツール**と捉え、**最終的な判断・分析は専門家が責任を持って行う体制**が望ましいでしょう³⁶。

品質面でもう一つ重要なのは**出力フォーマットの柔軟性**です。Agentはユーザーの指示に応じて、簡潔な要約から詳細な技術分析、表形式の比較表、スライド資料まで様々な形式でアウトプット可能です²⁶。例えば、「5W1Hを押さえた技術動向レポートをExcel表にまとめて」と指示すれば、技術項目ごとに関連特許を整理した表を作ることも期待できます。また**多言語出力**も可能で、日本語で質問して英語の調査報告書を生成させたり、その逆もできます。実務上、社内資料は日本語、取引先向けには英語サマリーを…といったニーズにも対応できる柔軟性は評価できます。

総じて、**ChatGPT Agentの検索精度・文書生成品質は飛躍的に向上しており、適切に使えば人間の調査を大いに効率化できる水準に達しつつある**と言えます。ただし「過信は禁物」であり³⁵、常に人間による検証・補完を前提として活用することが肝要です。

想定ユースケースと活用事例

ChatGPT Agentが知財実務にもたらす価値を、具体的なユースケースに沿って見てみましょう。先行技術調査・無効資料調査・競合動向調査といった典型的な場面での活用イメージと、実際の事例や期待される効果を整理します。

- **先行技術調査（特許出願前の新規性チェック）**：新しい発明アイデアについて、本当に新規・進歩的かを事前に確認するプロセスです⁷。ChatGPT Agentは発明の技術コンセプトを入力すれば、関連する既存特許や論文を世界中からピックアップし、その要旨をまとめてくれます。例えば発明の構成要素A, B, Cに対応する先行技術をそれぞれ3件ずつ探し出し、「Aについては〇〇特許（JP12345678）の手段Xが類似、Bについては…」という形で**発明と既存技術の対比表**を作らせることも可能です¹⁵。これにより、出願前に**致命的に類似した先行特許がないか**を網羅的に洗い出せます。実際、ある企業では自社開発中の発明に対してAIによる先行技術要約を行い、**出願可否の判断やクレーム調整に要する時間を大幅短縮**したとの報告があります¹⁴。新規事業分野での特許出願を乱発する際にも、Agentが事前スクリーニングすることで無駄な出願（後で拒絶になるもの）を減らし、コスト圧縮につながります。
- **特許無効資料調査（異議申立や無効審判のための文献探索）**：競合他社の特許に対抗する場合、その特許を無効化し得る先行技術文献を探す必要があります。ChatGPT Agentは**ターゲット特許の解析と反証文献探索**を一手に引き受けます。具体的には、ターゲット特許の請求項を読み込ませ、「このクレームを満たすそれ以前の公開技術を探して」と指示します。Agentはクレーム中の各要件に着目し、それを含む公開済み特許・論文を年代順にリストアップして提示できます。例えば「要件Xを備えた技術：特開2005-XXXXX号公報、要件Yについては米国特許US7,XXX,XXX号…」といった具合です。さらに「それら文献と対象特許の相違点は何か？」と質問すれば、**クレームチャート形式で相違分析**も行えるでしょう。無効化調査は極めて時間との戦いでもあります。Agentならば短期間で世界中の文献を網羅的にチェックし**見落としリスクを低減**できます³⁷³⁸。もっとも最終的な無効理由構成は弁理士・弁護士の腕の見せ所ですが、その**下準備をAgentがこなす**ことで、プロはより戦略立案に注力できます³⁶。
- **競合動向調査・パテントマップ作成**：自社の技術分野で競合各社がどのような特許を出願・権利化しているかを把握し、隙間領域を探したり開発戦略に活かす用途です⁷。ChatGPT Agentは**企業名や技術キーワードを軸に特許調査を定期的に行い、結果を構造化**するのに適しています。例えば「主要競合A社・B社・C社の過去5年間の特許出願を分析し、技術カテゴリーごとに件数をグラフ化して」と依頼すれば、Agentが各社名で特許DBを検索し、公開特許一覧から技術分類（IPCセクションなど）を集計し、**パテントマップ**やトレンドグラフを生成できます。実際、京大松尾研発のスタートアップであるエムニ社は、生成AIを活用して**自動パテントマップ生成**を行う事例を公開しています³⁹。同社の例では「横軸＝解決しようとする課題分類、縦軸＝課題解決手段の種類」という独自の二軸で競合特許分布図を描き、**競合が集中する領域や逆に未開拓の課題領域**を一目で把握できるようにしました⁴⁰。ChatGPT Agentを用いれば、同様の分析を社内の任意の観点でカスタムして行うことも容易です。例えば「電池材料分野で各社が重点を置いている技術要素をマッピングして」「画像センサー技術でまだ解決されていない課題は何か」といった問いを投げれば、Agentが公開特許や論文から情報を収集し**図表入りの分析レポート**を作成してくれるでしょう。これは**R&D戦略や投資判断にも直結するインサイト**を提供します³⁸⁴¹。
- **FTO調査（他社特許権侵害リスクの確認）**：自社製品・サービスが他社の特許権を侵害しないか事前に調べる「Freedom-to-Operate (実施の自由)」調査も重要です⁴²。ChatGPT Agentは製品仕様や技術要件を入力すれば、それに関連する既存特許を広範囲に洗い出してくれます。例えば「製品Xは〇〇という構造と△△という工程を含むが、これに類似した日本公開特許をすべて調べて」と依頼すれば、該当しそうな公開特許公報をリスト化し、それぞれ**権利範囲（請求項）を平易な日本語で要約**することもできます。さらに「それら特許が自社製品に与えるリスク評価をして」と指示すれば、Claimと

自社技術要素の対応を分析し、「特許Aは〇〇の点で類似するが△△要件がないため非侵害可能性あり」等、**簡易な見解**まで出力するかもしれません（※法的判断はAIに任せず専門家の確認が必要です）。これにより、**膨大な他社特許の中から重要なものを絞り込む**作業が効率化されます。特に海外市場展開時など、各国の関連特許を調べる必要がある場合に、Agentの多言語検索・翻訳能力は大いに役立ちます⁴³。人間が読むのに時間のかかる英語・中国語の特許も、Agentなら瞬時に日本語要約できますし、エムニ社の事例では**特化LLMを用いた翻訳でGPT-4を凌ぐ精度を実現し、1件10万円超の翻訳費を数十円まで削減**できたと報告されています⁴⁴⁴⁵。このようにFTO分野でも、Agentは下調べ時間の短縮と精度向上に資するでしょう。

以上のほかにも、**特許調査×ChatGPT Agentの応用シナリオ**は数多く考えられます。例えば：

- ・**技術動向レポート作成**: 特定技術領域の最新特許・論文動向を調べ、技術的課題のトレンドや主要プレイヤーを洗い出すレポートをAgentに作成させる（コンサルティング会社のアナリスト業務の一部代替）。
- ・**特許ポートフォリオ評価**: 自社または買収検討先の保有特許リストをAgentに解析させ、技術分類ごとの強み・弱みや重要特許を要約させる（IPランドスケープ分析への活用）。
- ・**特許リエクザミナー支援**: 特許事務所での中間処理において、拒絶理由通知に引用された先行文献をAgentに要点整理させたり、クレーム補正案に対する新たな先行技術を自動調査させる（審査官との応答戦略立案の補助）。

このように、**ChatGPT Agentは特許調査・分析のあらゆる局面で「調査時間の短縮」「網羅性アップ」「インサイト発見支援」に貢献**する存在です。現時点では一部試行的な活用例が専門家ブログ等で紹介されている段階ですが、今後は社内ナレッジと組み合わせた独自Agentの開発など、活用はさらに広がるでしょう。

導入上の課題と留意点

魅力的なChatGPT Agent活用ですが、**実務で採用するにあたっての制約やリスク**も十分検討しておく必要があります。

- ・**信頼性と誤情報リスク**: 前述のとおり、ChatGPT Agentの回答は高度とはいえ**100%正確ではありません**³⁵。特に法的判断を要する部分（進歩性の有無、侵害の成否など）は、人間の専門知識なしに下すのは危険です。Agentはあくまでファクト収集・分析補助に留め、**最終判断は専門家が責任を持つ**ことが前提となります³⁶。また、ごく稀にですが**AIがあり得ない特許番号や架空の判例を「それらしく」作り出す（いわゆる幻覚・hallucination）**可能性もゼロではありません⁴⁶³⁵。重要なレポートでは、Agentの出力に含まれる番号・固有名詞等を必ず原典と突き合わせて確認するフローを組み込むべきです。幸いAgentは出典リンクを提示できますから³⁴、**人間が検証しやすい形でアウトプットを得る工夫**（「必ず出典URLを付けて回答せよ」とプロンプトする等）が有効でしょう。
- ・**機密情報の取り扱い・漏洩リスク**: **未公開の発明内容や社内の極秘プロジェクト情報をAIに入力することへの懸念**は大きな論点です。日本の企業でも、「生成AIに社内情報を不用意に入力しない」というガイドラインを設ける例が増えています。特に特許出願前の発明は法的に**新規性喪失のリスク**も孕むため、その内容を外部システムに送信すること自体ナーバスになります。ChatGPTは2023年以降、ユーザーデータを学習用途に流用しないオプトアウト設定も可能になりましたが、基本的には**OpenAI側サーバーでデータ処理が行われるクラウドサービス**です。**日本企業の多くはこの点を慎重に考えており、未公開情報は原則入力しない運用が推奨**されています⁴⁷。実際、米国特許商標庁(USPTO)は2023年に職員がChatGPT等の生成AIを業務利用することを全面禁止する内部通達を出しました。「バイアスや不確実性、悪意ある挙動の懸念」が理由とされていますが、同時に情報漏洩リスクへの配慮もありました⁴⁸⁴⁹。その一方でUSPTO自身はAI活用を進めており、審査官向け検索ツールに類似文献検索などAI機能を導入しています⁵⁰。このように、**公的機関ですら生成AI利用のメリットとリスクを天秤にかけ慎重に進めている現状**があります。

対策としては、ChatGPT Enterprise版やオンプレミス設置型の大規模言語モデルを使うことでデータ漏洩リスクを抑える方法があります。実際、前述のエムニ社は自社で特許翻訳に特化したLLMをオンプレ環境で開発し、**機密データも隔離環境で安全にAI処理**できるようにして成果を上げています

44。大企業の知財部門であれば、社内サーバーに閉じたLLM環境（例えばMeta社の公開モデルに自社特許データでファインチューニングしたモデル等）を構築し、ChatGPT Agent相当の機能を内製する動きも考えられます。ただ、小規模組織ではコストが見合わない場合も多いため、当面は**ChatGPTのPro/Enterpriseプラン**を利用しつつ、**入力内容を工夫する（機微情報はマスキングする等）**現実的な運用になるでしょう。いずれにせよ、「**AIに何をどこまで任せるか**」の社内ルール策定が不可欠です。

- ・**法的リスク・責任の所在**: ChatGPT Agentが生成した調査結果やレポートをそのまま第三者に提供した場合、万一誤りがあったときの責任問題も考慮する必要があります。例えばAgentの見落としにより本来存在した先行技術を指摘できず特許を出願・成立させてしまい、後日無効に…という事態になれば、誰がその責任を負うのかという問題です。現状ではAIはあくまでツールであり、**成果物の責任はそれを利用した人間に帰属**します。特許調査報告書をクライアントに提出する業務では、AI補助を使った場合でも「**最終的な判断・報告は人間が行った**」ことを明確にしておくべきでしょう。また、AIの回答が誤って第三者の機密情報や個人情報を含んでしまうリスクは低いものの（特許公報等の公開情報を扱う限り問題は少ない）、出力内容の**二次利用にも注意**が必要です。例えば社内報告書の文章の大半をAIが生成した場合、その文章自体は著作物となりうるため社内利用に留めることが望ましいです（もっとも特許公報の引用などは著作権の問題は基本ありません）。現時点で明確な法規制はありませんが、将来的にAIが発見した発明の発明者性や、AIアウトプットの著作権問題など、知財とAIの法的交差領域は議論が深まるでしょう 51。ChatGPT Agent活用の際には、そうした**法的な位置付けの変化**にもアンテナを張っておく必要があります。

- ・**従業員の役割変化とスキルセット**: AIの導入により、特許調査担当者の業務内容や必要スキルも変わり得ます。単純なキーワード検索や大量の公報読み込みはAIが担う一方、**得られた情報を評価し戦略につなげる洞察力**がより求められるでしょう 36。ChatGPT Agentは「調査のルーティンワークを肩代わりし、専門家はより戦略的業務に注力できる」未来を示唆しています 36。そのためには、調査担当者もAIを使いこなすリテラシーや、AIの結果を批判的に検証するスキルが必要です。また、「AIが作ったレポートをそのまま提出」では付加価値が低くなりますので、**人間ならではの洞察や解釈を一段乗せる**ことが重要です。企業としても、AI活用によって浮いた時間を社員の戦略立案や交渉力アップに振り向けるなど、**人材育成とセットで運用設計**することが理想です。

以上、ChatGPT Agentを知財部門の特許調査業務に活用する可能性について、具体的プロセスから事例、課題まで検討しました。まとめると、ChatGPT Agentは「**調査＋分析＋報告**」の流れを一気通貫で高速化できる強力なAI秘書です。日本の特許実務においても、**先行技術調査の精度向上・無効資料探索の迅速化・競合分析の高度化**など、多方面でメリットをもたらすでしょう 37 38。一方で、**安全な運用（セキュリティ・信頼性確保）と人間の専門知識による補完**が欠かせない点も強調されます 47 35。現時点ではまだ黎明期とはいえ、各社の工夫次第でChatGPT Agentは「知財部門の生産性を飛躍的に高めるツール」となり得ます。AI調査員の力を借りて煩雑な調査業務にサヨナラし、人間はより創造的な知財戦略立案に注力できる未来が期待されます 36。

参考資料:

- ・OpenAI, 「ChatGPTエージェントが登場：研究とアクションをつなぐ新たな…」, 2025年7月17日 1 4
- ・TechCrunch, “OpenAI launches a general purpose agent in ChatGPT”, 2025年7月17日 3 29
- ・角淵由英, 「先行技術調査のプロンプト（ChatGPT o3で作成）」, note, 2025年5月5日 9 15

- ・駒田亮成, 「ChatGPTのGPTsで特許調査の負担を解消しよう」, FreedomBuild, 2025年6月6日 ²²
¹¹
- ・エムニ株式会社, 「AIで特許調査のコストを1000分の1に | 活用戦略を詳しく解説」, オウンドメディア記事, 2025年1月10日 ⁵² ³⁹
- ・UnitedLex, “Putting ChatGPT to the Patent Analysis Test”, 2023年2月 ²⁰ ³²
- ・Gizmodo, “The U.S. Patent Office Won’t Let Its Employees Use AI Tools Like ChatGPT”, 2024年11月19日 ⁴⁸ ⁵⁰
- ・その他、OpenAIシステムカード ⁵、AI総研レポート ³⁰、PatentNextブログ ³⁵ 等.

¹ ²¹ ²⁶ Introducing ChatGPT agent: bridging research and action | OpenAI
<https://openai.com/index/introducing-chatgpt-agent/>

² ChatGPTの新機能「ChatGPT agent」登場 AIがさまざまな作業を ...
<https://www.itmedia.co.jp/aiplus/articles/2507/18/news053.html>

³ ⁴ ⁶ ²⁵ ²⁹ ³³ OpenAI launches a general purpose agent in ChatGPT | TechCrunch
<https://techcrunch.com/2025/07/17/openai-launches-a-general-purpose-agent-in-chatgpt/>

⁵ ChatGPT agent System Card | OpenAI
<https://openai.com/index/chatgpt-agent-system-card/>

⁷ ⁸ ⁹ ¹² ¹³ ¹⁵ ²⁴ ²⁷ ⁴² ⁴⁷ 先行技術調査のプロンプト（ChatGPT o3で作成） | 角淵由英（つのぶちよしひで）
<https://note.com/tsunobuchi/n/neb7bdac9bcd>

¹⁰ ¹¹ ¹⁴ ²² ²³ ChatGPTのGPTsで特許調査の負担を解消しよう - FreedomBuild
<https://freedom-build.com/chatgpt-gpts-patent-summary/>

¹⁶ ¹⁷ ¹⁸ ¹⁹ ²⁸ ³⁰ ³¹ ³⁴ GPTのDeep Searchとは何か？実際に使ってみたら想像以上にすごかった | 井上 翔太
<https://note.com/hjires2bs/n/n709ebed0ef94>

²⁰ ³² Putting ChatGPT to the Patent Analysis Test - UnitedLex
<https://unitedlex.com/insights/putting-chatgpt-to-the-patent-analysis-test/>

³⁵ ⁴⁶ ChatGPT and Intellectual Property (IP) related Topics
<https://www.patentnext.com/2023/03/chatgpt-and-intellectual-property-ip-related-topics/>

³⁶ ³⁷ ³⁸ ³⁹ ⁴⁰ ⁴¹ ⁴³ ⁴⁴ ⁴⁵ ⁵² AIで特許調査のコストを1000分の1に | 活用戦略を詳しく解説 - オウンドメディア
<https://media.emuniinc.jp/2025/01/10/ai-patent-search/>

⁴⁸ ⁴⁹ ⁵⁰ The U.S. Patent Office Won’t Let Its Employees Use AI Tools Like ChatGPT
<https://gizmodo.com/the-u-s-patent-office-wont-let-its-employees-use-ai-tools-like-chatgpt-2000526489>

⁵¹ US patent office confirms AI can't hold patents | The Verge
<https://www.theverge.com/2024/2/13/24072241/ai-patent-us-office-guidance>